事例研究の結びに

魅力あるアフター・スクールの場には、魅力ある大人もいる

中間 真一　HRI主席研究員

さまざまなアフター・スクールの現場

「アフター・スクール」の現場を求め、私たちは国内5カ所、アメリカで4カ所に足を運んだ。国内の事例として選んだ5つの取り組みは、利益を求める経済活動から、まったくのボランティア活動まで、さまざまな運営団体による特徴的な活動の場であった。企業の社会貢献活動や、NPOによる活動、そして行政による支援の事例も含まれている。

また、入念に組み立てられたプログラムによる活動もあれば、プログラムの気配を微塵も感じられない活動まである。このように、「アフター・スクール」の現場は多様性に富んでいた。

学校と家庭の間だからできること

アメリカの事例も含めて、すべての事例現場を俯瞰しつつ、再度自問してみた。「放課後って、何だろう?」と。

それは、学校生活ではない。家庭生活でもない。しかし、非日常の特別の時空間というよりも、毎日繰り返される日常の時空間に近い。そこでは、子どもたちは、先生の目も親の目も気にする必要はない。共にいるのは仲間たちだ。時々先生でも親でもない面白い大人、おっかない大人、すごい大人と出会うこともある。放課後とは、学校と家庭の間にある、子どもたちが中心にいる自由な時空間と位置づけられるだろう。

取材先で撮影した写真を見渡すと、子どもたちの笑顔、真剣な顔、いたずらをたくらむ顔が、そこかしこに並んでいる。時には、思い通りにならずに困った顔もある。自分にはできないことを、スルッとやってのける大人の所作に尊敬の眼差しを向ける顔もある。

みんなが同じ顔をしていなくても、同じ向きを見ていなくても、同じように動かなくても大丈夫。だけど、友だちや居合わせた大人たちから孤立してしまってはつまらない。さらに学校や家庭との違いを挙げると、「いやなら、やめられる」、「やりたくなければ、やらなくていい」、決められたルールや制約条件が圧倒的に少ない場なのだ。「アフター・スクール」の場で、子どもたちは縛られないし、強いられない。彼らの〈自由〉が確保された時空間なのだ。

そして、子どもたちの自由な時空間であるとともに、時に遠巻きに、時に目の前で、知らぬ間に大人たちとも関わりを持てる場なのだ。そんなことが、取材に出かけた事例現場の様子から見えてきた。

放課後の自由の危機と効率向上

しかし、そこにも〈管理〉という発想が必要とされつつある。なぜなら、暮らしのまちが、子

どもたちにとって安全ではなくなってきているからだ。そのために、保護者は「放課後の子どもたちの安全と安心」の確保を強く願い、それを提供するサービスを求める。携帯電話を使った居場所確認サービスもあれば、放課後を安全に過ごせる場を提供するサービスもある。それらのサービスへの需要は高まるばかりだという。

かくして、子どもたちの「アフター・スクール」は、監視と保護から逃れられないものとなりつつある。そもそも、アメリカのアフター・スクール・プログラムは、そのような背景も大きく影響して生まれているようだ。

もうひとつ、「アフター・スクール」のプログラムづくりが積極的で密度も高まっていくほど、親たちが子どもへの〈学習効果〉の向上を期待する傾向も高まってくる。早期教育や進学準備、教育サービス産業の隆盛を見れば、それは一目瞭然だ。

確かに、情報社会の中に育つ子どもたちの前には、学習しなくてはならない知識が山積みにされている。それを限られた学校という時空間だけでこなすのは、困難となりつつある。放課後まで学習に占められ始めている。

しかし、子どもたちの日常の時空間は、〈学習〉で覆い尽くされて良いのだろうか？ 今回取材に協力していただいた現場で、自ら子どもたちと関わっていた方々の答えは、恐らく「良くない」であろう。子どもたちが自ら育っていこうとする環境には、〈学習〉だけでなく、遊び、学び、働きが渾然一体となった、自ら意図して動くための自由な場が必要だ。大人社会には、もっと子どもの自由を見守るゆとりを求めたいものだ。今回の事例研究を通じ、このことを痛切に感じた。

アフター・スクールの魅力の源泉

それぞれの「アフター・スクール」の場や取り組みは、どれも素晴らしかった。最後に、その魅力の源泉を探ってみたい。

端的に言って、まずは〈人〉だ。魅力的な場は、決して偶然からできあがったものではなかった。熱さとやさしさを持った大人が場をつくり、支えていた。どこの現場にも、そういう大人の存在があった。

また、「アフター・スクール」は日常の場だからこそ、その場が「開かれ続けていること」、「つくられ続けていること」に大きな価値があると感じた。バルセロナのサグラダ・ファミリア教会のように、つくり続けている場には、いつも新しさがあり続ける。生きている。だから、子どもたちもその場にいることが楽しくなり、集まってくる。生きた場ならではの誘因力だ。

そして、まちの大人たちが向ける子どもたちへの眼差しの存在も大きい。バラバラな個人社会の中では、地域社会という連帯感は薄れるばかりだ。しかし、豊かな「アフター・スクール」のある場には、豊かな地域社会のつながりが再生されていた。その大人たちが、子どもたちを「見守り」、子どもたちに「魅せ」、子どもたちの育ちを「見通せる」ことが大切なのだ。

このような場を目指してつくり続ける途上に、冒頭で高橋勝先生が指摘された〈専業子ども〉化を防ぐこともでき、阿南健太郎氏の主張された〈子どもも大人も育つ場づくり〉も進むのではなかろうか。子どもも大人も、生き生きと魅力を増して成長できる場、それが「アフター・スクール」の真骨頂なのだ。